

離縁の理由は愛されたいと思ったからです

＊Characters＊

＊ルーナ＊

幸せな結婚に憧れる伯爵令嬢。
五歳の時に決められた
政略結婚の相手・ジョゼフから
「愛情を求めるな」と
冷たく告げられ、深く傷つく。

＊エミリオ＊

隣国の公爵令息。両親から
結婚を急かされているものの、
理想の相手が見つけられずにいる。
偶然立ち寄った店で働くルーナに
一目惚れして……？

＊ジョゼフ＊

ルーナの婚約者で侯爵家の
跡継ぎ。非情な結婚後の
条件を記した契約書を
ルーナに突きつける。

＊フェルナンド＊

ルーナが心から頼りにする
幼馴染の伯爵令息。
ルーナの事業を支える
心強い存在。

＊アグネス＊

ジョゼフの愛人。
気が強い美人で、
派手な浪費家。

目次

離縁の理由は愛されたいと思ったからです

7

番外編 まさかの再会？

267

離縁の理由は愛されたいと思ったからです

結婚後の条件は次に書いておく。それを守るように。

第一条 私のプライバシー、プライベートを侵害することは許さない

第二条 白い結婚とする

第三条 アグネスを虐めてはならない

第四条 侯爵家の夫人として務めよ

第五条 私の金の使い道に異論は唱えない

第六条 王家主催のパーティー以外出席はしない

第七条 この手紙のことは決して他言してはならない

プロローグ

私、ルーナが五歳の時に、その婚約は決まった。婚約相手の彼——ジョゼフ様も、まだ十三歳。機嫌の悪そうな顔というのが最初の印象だった。周りの大人はみんな優しい顔をしているのに、このお兄さんは、初めて会った私を一目見てすぐに顔を顰めた。

その仕草がまだ幼い私には怖くて、私はママのドレスの後ろに隠れた。

お兄さんの両親は、私のことをかわいいと言って褒めてくれた。でも、その日は婚約者だというお兄さんの顔が見られなかった。

——なぜなら、怖かったから。

「ルーはまだ子どもだから、婚約が何かは分かっていないと思う。いいかい、ルーはさっきお会いしたお兄さんと大人になったら結婚するって約束をしたんだ」

「結婚？ パパとママみたいに、あのお兄さんとルーと一緒に住むの？」

そう質問をすると、パパは私のことを抱き上げて笑った。

「まだまだ先のことだよ？ ルーは私たちの大事なお姫様だから、まだ嫁に出すつもりなんてない。パパもママも、ルーといるのが幸せなんだよ」

そう言っただけにキスをしてくれた。幼心に思ったの。

いつか本当に、私にあの怖いお兄さんを愛する日が、そして愛される日が来るのかって……だって、結婚って仲良く一緒に暮らすことを言うんでしょう？

パパもママも仲が良いもの。だから、私とお兄様がいるんでしょう？

* * *

——それから五年が経ち、十歳になったある日、私は久しぶりに婚約者のお兄さんと会った。婚約してから会うのは今日を含めて三回目。

お兄さんは十八歳になっていた。あの時まだ少年だったお兄さんは、もう立派な大人の男性だった。

「ジョゼフ様、お久しぶりです」

そう言っただけで挨拶をした。

「ああ、ルーナか。相変わらずチビだな」

見た目は大人になっていたけど、機嫌の悪い顔はあの時のままだった。でも、私は知っている。パパとママの前では、ジョゼフ様はいつもいい顔をしていることを。

「ベルモンド伯爵、お久しぶりです。ルーナ嬢を久しぶりに見ましたが、また一段とかわいらしくなられていますね」

パパとママの前では、そう心にもない挨拶をして、私と二人になると悪態をついた。

「何で私の婚約者がこんなガキなんだ……友人たちにはロリコン呼ばわりされるし、婚約者同伴のパーティーへも行けやしない。いいか、私は忙しいからしばらく会えない。誕生日だったな、ほら、これをやるよ」

そう言いながら星の形をしたブローチをぽいつと投げられたが、私はそれを受け取ることができなくて床に落としてしまった。

「あつ……」

「つたく、トロい奴だな。いらぬなら捨てとけ。どうせ安物だ」

そう言っただけでジョゼフ様は出て行ってしまった。ジョゼフ様の家は由緒正しい侯爵家、うちは格下の伯爵家でよくある政略結婚だった。

チビとか、トロいとか……だって仕方がないもん。頑張っただけで大人になろうと思っても、私が一歳歳を取ると、ジョゼフ様もすぐに一歳歳を取る。だから、年齢差は永遠に埋まらない。

それにどんなに大人のふりをして、所詮十歳はまだ子どもだ。そんなこと、分かっているのに悲しくなった。こんなプレゼントなんていらぬ……欲しくない。

私のパパとママは実業家で、ジョゼフ様の侯爵家とはビジネスで繋がっている。

侯爵家の領地では肥沃な大地で良質な作物を作っていて、販売経路で頭を悩ませていた侯爵様からの依頼を受け、パパが力を貸しているって聞いた。

ママは国内で有名な服飾店を営んでいる。どれだけ有名かと言うと、常に予約が取れないほどの人気店と言えば分かってもらえるかなあ。

パパは国外の食材を始め、ママの店でも使われている生地も取り扱っている。そのため国外にも顔が広くて、うちには外国人のお客様も多い。

外国人のお客様はいつも変わった物をお土産にくれるから、自ずと目が肥えてしまった。

お兄様はそんな両親の影響を受けているからフットワークが軽く思い立ったらすぐに行動する。いつも一人で国内外問わず出掛けていて、一度家から出ると長期間滞在するので、しばらく顔を合わせることもない。我が家はそんな家庭なの。

「ねえ、パパ！ これパドルさんからお土産にいただいたのだけど、珍しいからこれを仕入れてみたら面白くない？」

私はそう言って、パパにパドルさんからもらったお土産を見せながらアイデアを話した。パドルさんがくれたのは、パドルさんの国にしかない不思議な動物のプローチだった。パドルさんは隣国、バルナス王国の人で、パパとは仕事の関係で交友があるから我が家によく来るの。優しくて知識が豊富で、パドルさんの話を聞くのが毎回とっても楽しみなの。

「これを？ どうやって販売するの？」

パパは、いつも私の話をちゃんと聞いてくれる。もちろん却下される時もあるけれど、その時も必ずなぜ却下なのか、その理由を説明してくれる。

「あのね、キャラクターにするの。愛らしい顔立ちにしてノートに印刷するの。そうすれば、かわ

いい動物に癒やされて勉強も捗ると思うの」

勉強する時にかわいい文房具を使うと、モチベーションが上がるし気分もいい。

「そうだね、令嬢向けにしたらいいかもしれないね。それにこの動物は幸運をもたらすと言われていいるから、それも作用して人気が出るかもしれないよ。そうだな……令嬢向けに作るとしたらプラスして花も一緒に付けるとかわいらしくなるね」

「お父様、すごい！ ルーが思っていたよりもっと素敵になった」

パパは笑顔で私の頭を撫でてくれた。

「ルーはすごいね。パドルさんも褒めていたよ。さすがパパとママの子だ」

それからパドルさんは、我が家によく来て珍しい物をたくさん紹介してくれた。

それらは全て、宝物のようにキラキラと輝いて見えた。

「ルーナ嬢、私の息子を紹介します。歳はルーナお嬢様より二つ上になります」

パドルさんは商売をしているけれど、隣国バルナス王国の伯爵様なんですって。パドルさん、ずっと私に商人だと言ってたのに！ 知らなかった！

「はじめまして。僕はフェルナンド・デュボンと言います。よろしくお願い申し上げます」

緑色の瞳は新緑を思わせる爽やかな綺麗な色、そしてミルクティーのような薄い茶色の髪の毛が、少し跳ねているところが、何だかわいらしいと思った。

「はじめまして。パドルさんにはいつもお世話になっています。ルーナ・ベルモンドです」

それからフェルナンドとよく会うようになり仲良くなった。

それからさらに月日は流れ、私は十五歳になった。

「え？ ルーナに婚約者がいるの？」

「うん。言わなかったかしら？ パドルさんに聞いてない？」

パドルという名称は商人の時に使っている名前なんですって。本来はデュポン伯爵と呼びするようだけど、本人は「パドルさん」と呼ばれる方が良いみたいなので、私はそのまま呼んでいる。ちなみにパドルさんはこの国の子爵位を持っていて、フェルナンドが継ぐ予定だという。

「……知らなかったよ。だって、相手の婚約者を見たことないし、話題にも上がらないし、ルーナくらいかわいかったら放っておかないだろう？」

「だって相手は大人だもん。八歳歳上で、最後に会ったのは三年前かな。毎年誕生日にカードが届くくらいしか交流がないし、そのカードだって、義務的な感じだし……」

私の誕生日を覚えていたのかも不明だし、そもそもカードだって本人が送ってきているとも限らない。

「伯爵は知っているの？ ルーナはそれで良いの？」

「貴族の結婚は家同士の話だから。結婚したら仲良くできるのかな……想像つかないから分かんないけど、お父様やお母様のように仲の良い夫婦には憧れるわ」

そう言いながら、つい沈んだ表情になってしまう。

いくら周りからかわいいと褒められても、ジョゼフ様は子どもだと言って私をバカにする。ピンクの瞳にブラチナブロンドのふわっとした柔らかい髪の毛は気に入っているけれど、ジョゼフ様と対面すると一気に自信がなくなる。私たちが仲の良い夫婦になることは、おそらくこれからもない。「ごめん、変なことを聞いてしまった」

「良いの。別に隠していたわけではないから気にしないで。それよりも、また外国のお話を聞かせて！ シルビア様とは相変わらず仲が良いの？ また遊びに来てほしいって伝えてね」

フェルナンドは十七歳。数々の国を巡り、面白かったことや危なかったこと、その国にしかない動物や食べ物のお話を、いつも面白おかしく話して私に聞かせてくれる。シルビア様はフェルナンドの婚約者で、この国の子爵家の令嬢だ。

「いいなあ。お父様やお母様も外国に買い付けに行っているし、私も行ってみたい！ お兄様ばかりズルいわ」

花嫁修行のため、私には家庭教師が付けられている。マナーはもちろん、刺繍や編み物に至るまで全てのことが花嫁修行の一環だった。

十六歳になると、ジョゼフ様と結婚式を上げることが決まっていた。

この家で娘として過ごせるのもあと一年だ。ただ、私の希望で経営学も学ばせてもらっていて、パパとママの出資の元、自分自身で経営を行う店もある。だから普通の令嬢たちとは違って、お嫁に行ってからこの家との繋がりは深いだろう。両親は私がやりたいことに反対はしないけど、赤

字が出たらすぐ撤退だと言われている。その辺はさすがにシビアだ。

「早く大人になりたい」

これが私の口癖。ジョゼフ様に子どもだとバカにされて傷ついたからだ。ジョゼフ様は私に興味がないから、私がお店を経営していることを知らない。子どもだと言われながらも、私なりに頑張って結果を出しているし、人気店になっている。お店を経営していることが私の誇り。

* * *

「ジョゼフ！ いい加減にしろ！ お前、まだあの女と切れていないのか！」

ここは侯爵家の一室。

「切れるだなんて彼女に失礼ですよ！ 彼女はもう二十五歳です。嫁^いき遅れた理由は私ですからちゃんと責任を取るつもりです」

「……責任だと？ バカなことを言うな！ もうすぐ結婚を控えているにもかかわらず、婚約者にあわずに昔から付き合っている女に入れ上げて。相手はうちより格下だが、王家からの信頼も厚いベルモンド家だ。慰謝料でも何でも払って今すぐに別れる！ それくらいの金なら出してやる！ 女には婚家の世話もしてやるから別れる！」

私には愛する女性、アグネスがいる。昔から情を交わしている間柄で、アグネスと別れるつもりはない。

「父上は、私の結婚と共に爵位を譲って領地に戻られるのでしょうか？ すでに書類上では私が当主のようなものです。私には私の考えがありますので、放っておいてください」

「お前に任せていいものか！ 勝手ばかり言いよって！ フォローはせんからな」

「お好きにどうぞ」

そう言っ父の前から立ち去った。

結婚まで後半年か……そろそろ動く時が来たか。

俺はルーナに手紙を書くことにした。

ルーナへ

結婚にあたり、条件を伝えておく。

ルーナとは家同士の繋がりのため結婚はする。

だが、私から愛されることを望むな。私の愛情はアグネスにだけ向けることになる。

ルーナが存在がある限り、アグネスとは正式に結婚することができない。

ただし結婚後、一年経って妊娠の気配がないと第二夫人を迎えることができる。貴族にとつて跡

継ぎは必要不可欠だからだ。

私はルーナと夫婦になるが、深い関係になることは望んでいない。一年後に離縁するか第二夫人を迎えるかは、ルーナの判断に^{ゆた}委ねる。

ルーナと結婚後は、アグネスも侯爵家に住まわせることになる。結婚後、他の女性の元に通つて

いることが世間に知られると外聞が悪いからだ。

この件については、ルーナ自身が決め、ルーナがサインをするように。
結婚後の条件は次に書いておく。それを守るように。

第一条 私のプライバシー、プライベートを侵害することは許さない

第二条 白い結婚とする

第三条 アグネスを虐めてはならない

第四条 侯爵家の夫人として務めよ

第五条 私の金の使い道に異論は唱えない

第六条 王家主催のパーティー以外は出席しない

第七条 この手紙のことは決して他言してはならない

以上。

まあ、こんなものだろう。ルーナはガキだから、おそらく意味も分からずにサインをしてくるだろう――

そして、その後戻ってきた返事に彼女からのメッセージは何もなく、私の送った文章を上書きして一部修正されたものが届いた。予想していたものとは若干の違いはあったが、これでいいだろう。私は快くサインをした。

第一条 私の（お互いの）プライバシー、プライベートを侵害することは許さない

第二条 白い結婚とする

第三条 アグネスを虐めてはならない

第四条 侯爵家の夫人として務めよ（侯爵家当主に相応しい行動を望む）

第五条 私の（お互いの）金の使い道に異論は唱えない

第六条 王家主催のパーティー以外は出席しない

第七条 この手紙のことはお互い他言してはならない

「私」のところが「お互い」になっているだけだが、一応ちゃんと書類の意味を理解することはできたようだ。

一年後に離縁するか第二夫人を迎えるかはルーナ自身に決めさせて、サインをさせる。他言はしないようにと書いたもので、これで周りが知ることはないだろう。

同じ内容の書類を二部用意して、私とルーナで一部ずつ持つことになった。

結婚式はもうすぐで、ルーナに会うのも久しぶりだ。自分が最低なのは理解しているが、子どもの機嫌を取るのには面倒なんだ。

ルーナは私の顔を見る度、怯えた顔をしていたな……

子どもは手が掛かり、機嫌を取るのが面倒で時間の無駄。そんな子どもと子を作ろうとはまっ

たか思わない。

* * *

結婚式当日。

とうとうこの日がやってきた――

結婚式の半年ほど前にジョゼフ様から届いた手紙を見て、私は悲しくなって泣いた。

ジョゼフ様は、私と違って大人の男性だ。婚約期間中も頻繁に会うことはなかったし、彼に懇意にしている女性がいてもおかしくはない。そう思っていた。貴族の結婚は恋愛ではなくて、あくまで家のためにあるものだから。

結婚後、跡継ぎを産んでから夫に愛人がいることを知った女性の話を聞いたことがある。お茶会などでも、そういった話は常に話題に上がる。

政略結婚なんだから仕方ない、男の人なんてそんなもの。そう思っているけど、両親が仲良くしている姿を見ていると、できれば自分も両親のような夫婦になりたい……なんて淡い期待を抱いてもおかしくはないでしょう？

でも、あの手紙で私の心は冷えていった。

――だって、「愛されたいと思わないこと」ですって……？

悲しくて泣いた。

辛い現実には泣いた。

情けなくて泣いた。

夫婦であつても、夫婦にはなれない関係。

愛情を求めない、冷えた結婚生活。

私は、ジョゼフ様を愛することはできないと思った。

こんな恥ずかしいこと、誰にも相談できない。

悲しくて悲しくて、手紙を受け取ってからしばらくは一人で静かに泣く日々を過ごした。家族は

もちろん、侍女にもメイドにも、誰一人として知られたくない。

私は愛されない存在のお飾りの妻になるのだ。

それを事前に知らされ、そして今日、ジョゼフ様と結婚する。

そして一年後には離縁を申し出る――

離縁後は、両親にも兄にも迷惑を掛けずに一人で暮らしていけるようにしなくてはならない。

我がバルモンド伯爵家は代々商人の家系で、私も自分の商売をさせてもらっている。父が輸入している食材でお菓子を考案し、職人に作らせて販売していた。これは友人のフェルナンドの助けもあって実現できている。

このお菓子は貴族たちのお茶会で人気が出て、注文を受けて屋敷に届けていたが、一年前、貴族街にショップをオープンした。今のところはとても好評で人気店となっている。

この後は庶民向けにも安価で美味しいお菓子を提供する予定で、こちらもまたフェルナンドが手伝ってくれるという。

結婚すると、彼とは今のよう頻繁に会うことはできなくなるだろう。でも、お互いのプライベートには口を出さない約束になっているから、ジョゼフ様は私が何をしても誰と会っていても何も思わないでしょうね。

私にはタイムリミットがある。一年であと五千万リル稼がなくてはならない。私の個人的な蓄えが五千万リルあるから、合わせて一億リルになる。

両親が一億リルを持参金として持たせてくれたけど、そのお金は両親に返したいからだ。

お金は関係ない。きつと、そう言ってお父様は受け取らないと思う。

でも、これは私の決心の証。

家族に愛されて育ってきたけれど、夫には愛されない娘でした。ごめんなさい。

一年後、そう伝えよう――

第一章

結婚式にはたくさんの人が参列してくれて、たくさんの祝辞をもらった。

一番困ったのは、神様に嘘をついたこと。

『生涯愛することを誓いますか？』だなんて、呪いの言葉に思えて仕方なかった。私が返事をできずにいると、ジョゼフ様は私にしか聞こえないように小さく舌打ちをした。

私は小さな声で、「はい」と一言だけ返事をした。

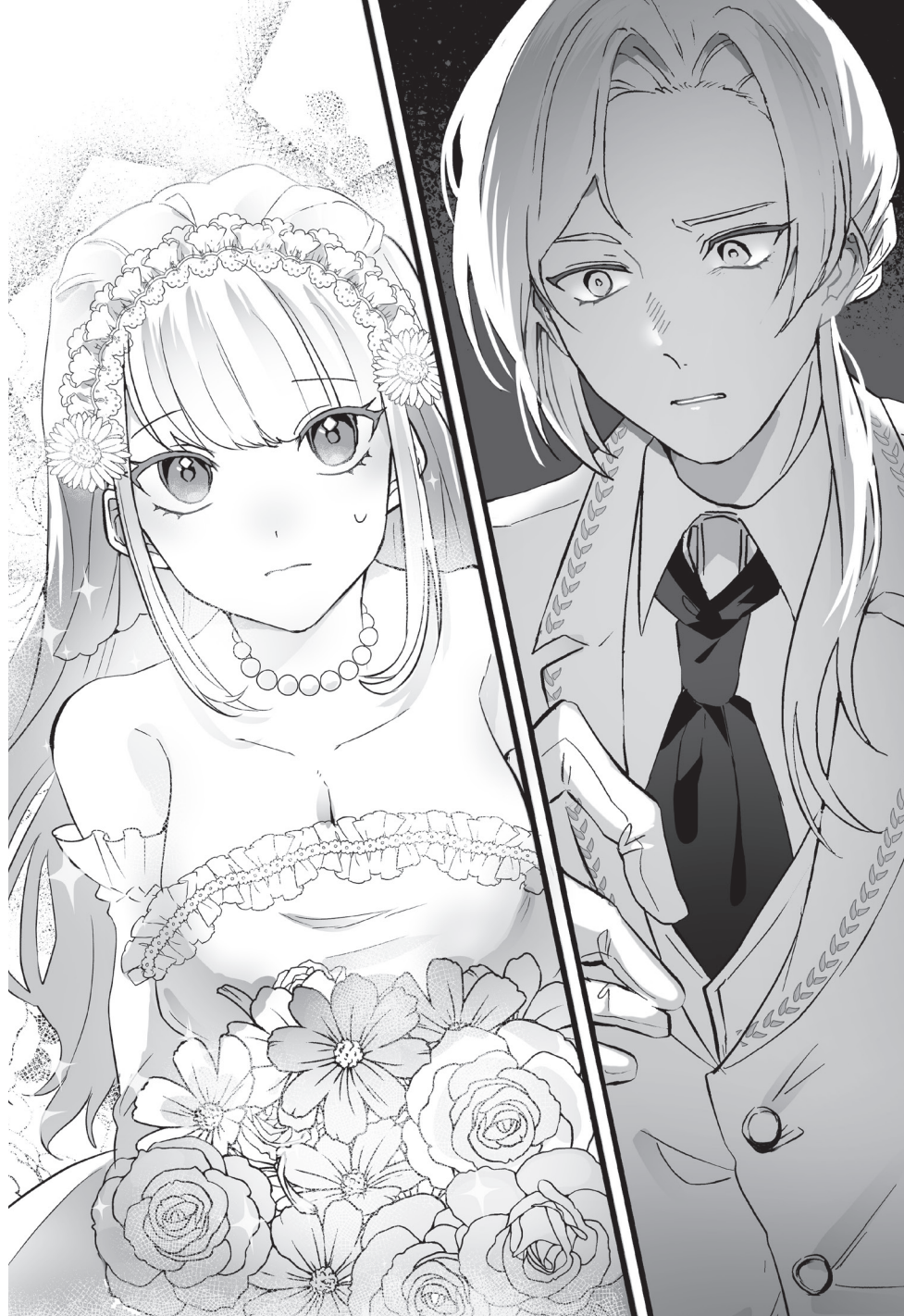
その後、誓いのキスをする時にベールを上げられたが、この時なぜか、ジョゼフ様は私の顔を見て固まった。

何かおかしいところがあったのだろうか……？

身長差があるので、自然とジョゼフ様を見上げる形になった。何年ぶりにジョゼフ様と向き合
い目が合った。

花嫁のベールは胸元までしっかりと下りていたし、結婚式当日はベールを上げるまで花嫁の顔を見るのを禁じられているから、ここで久しぶりの対面となった。

ニヤリと薄気味悪く笑ったジョゼフ様の顔が近づいてきて、私は気持ちが悪くて咄嗟に膝を折った。そのため、ジョゼフ様の唇が触れた場所は私の額ひたいだった。



このことは初々しい花嫁が恥ずかしがったからだと好意的に捉えられ、その後、多くの人に語り継がれることになった。

* * *

「じゃあ、行ってくるよ」

「行つてらっしゃい。私たちが一緒にするにはあのガキと仮初め^{かりそめ}の結婚をしなくてはいけないのでしょう？ それなら喜ばしいことじゃないの。どうして冴えない顔をするのよ」

「……面倒なだけだ」

キスをしてアグネスの家を出た。明日は結婚式だ。また邸に戻れば説教されるのだろうか……

私は二十四歳で侯爵家の当主だ。それなのに執事もメイド長も、ネチネチと煩^{うるせ}い。

今日も邸に帰ると小言を食らった。「明日は結婚式だから部屋で休む」と言つて二人を撒いた。

私の結婚式をもって両親は領地へ引つ込むことになり、明後日、アグネスが侯爵家に引越してくる。

といつても、アグネスの生活家具はすでに邸に用意しており、身一つで引越してきても問題なく生活できる。

結婚後の契約があるから、ルーナはこの件に異論はないだろう。

明日、とうとうあの五歳だったルーナとの結婚式だ。ままごどのような結婚生活はまっぴらごめ

んだ。私はロリコンではないし、成熟した大人の女の魅力にしか興味はないのだ！

——そう思っていた。

結婚式当日、美しく成長したルーナを見るまでは……

教会で誓いの言葉を言えずにいるルーナに思わず舌打ちが出た。その後は、誓いのキスをする予定になっていた。頬にでも軽くすれればいい。そう思い、花嫁のベールを上げた。

するとそこには、女神かと思紛うばかりの美少女がいた。胸まで下りたベールを上げると、張りのある触り心地の良さそうな胸の膨らみも目に飛び込んできた。

これがあの子もだったルーナなのか……彼女のあまりの美しさに、私は思わず言葉を失った。神父から誓いのキスを促され、ルーナの小さな艶のあるピンクの唇に吸い込まれるように顔を近づけると、ルーナは膝を折り、私は彼女の額にキスをするようになった。

初々しいその仕草は、私だけではなく式に参列していた男たちをも虜にした。

その後は、結婚披露パーティーだった。白いレースのドレスに身を包むルーナは、はつきり言うとても美しかった。

レースに隠れたその体のラインは若々しく、肌にはハリがあり、特に胸の膨らみが魅力的だった。

「おい、ジョゼフ！ あんな若くて美しい嫁さんを貰うなんて羨ましいぞー！」

「ベールが上がった瞬間に息を呑んでしまった！」

「いいな、羨ましい……あんなかわいい嫁さんと今日から毎日楽しみめるなんて……」

髪をアップにしている後ろ姿にさえ気品と色気が漂う。大胆に開いている背中のラインに目を奪われ、他の男に見られたいとさえ思った。

「どうやったら、あんなかわいくて若い嫁さんをゲットできるんだよ！ 子どもだと言って今まで隠しておいたんだろ！ 二十四歳なんて十六歳から見たらおっさんだからな！」

……今までルーナのことをガキだと思っていたが、逆にルーナから見たら私がおっさんなのか。

「おい、アグネスとは別れたんだろうな！ 嫁さんを泣かせるようなことはするなよ！」

「まあ、ルーナちゃんならたとえジョゼフと離縁したとしても、次の相手は引く手数多あまただろ。俺も立候補したいくらいだ！」

そんなバカなことを言う友人たちを置いて、ダンスの披露の時間が来たとルーナを迎えに行った。

友人の令嬢たちと話をしているルーナは花が綻はなぶように可憐かわいらだった。ところが私がルーナの名を呼ぶと、彼女は一瞬にして表情をなくしてこう言った。

「侯爵様、何かありませんか？」

まるで他人と話しているような言い方だ。以前はちゃんと名前と呼ばれていたと思うが……

私が侯爵家を継いだことにより、そう呼ぶことにしたのだろうか……？

「友人たちとの会話中に申し訳ない。ダンスの時間なんだ。私たちが踊らないと他の人たちが踊れないから、君を誘いに来たんだ」

結婚披露パーティーの主役は俺たちだから、初めにダンスを披露しないといけない。

なぜ、俺は説明口調なんだ……ルーナと話すのにまさか緊張するなんて。

「それは申し訳ございませんでした。話に花が咲いておりましたわ」

「いや、構わないよ」

「皆さん、ごめんなさい。一曲だけ踊ってきますわね。それでは楽しんで行ってくださいね」

そう言つて、ルーナは友人たちと別れた。一曲だけつて、わざわざ念を押す必要があるか？ 夫婦になつたんだし、二曲踊る予定だろう。

それから、俺はルーナとダンスを踊った。天女の羽衣でも纏っているのではないかと思うほど、軽やかに舞うルーナとのダンスは、とても楽しかった。

もう一曲……と思つていたら、案の定手が離された。

周りから拍手をされたので、二人で揃つて礼をする。

「少し疲れましたわ、休憩してまいりますわね」

周りに人がいるからか、ルーナは笑顔でそう言つた。その笑顔はまるで仮面を貼り付けたようなもので、友人たちと話をしていた時のかわいらしい笑顔とはまるで違つた。

名残惜しくルーナを見てみると、友人たちが冷やかしに来た。

「ジョゼフ、今夜はこれからお楽しみだろ？ あまり飲みすぎるなよ？」

そう言いながらも友人は酒を渡してきた……お楽しみ？ ああ初夜か。そうだな、飲みすぎは……つて、俺はルーナを抱くことができない！ こういうことなら契約について、改めて話し合

いが必要だ！

休憩中のルーナを迎えに行き、今日の披露パーティーに来てくれた招待客に挨拶をする。

皆は口を揃えてルーナを美しいと絶賛した。ルーナは別名『ベルモンド家の至宝』とまで言われていたようだ。

知らなかった……

そして、なんとこの場には王太子夫妻も来ていたので、ルーナと挨拶に行つた。

「ルーナ様、ご結婚おめでとう。いつもお世話になつているから、祝辞が言いたくて来ちゃつたの」

王太子妃殿下が「来ちゃつたの」という関係なのか？

「まあ、畏れ多いことでございます。この度はこのような場所にまでいらしていただき、誠に光栄ですわ。ありがとうございます」

王太子夫妻に優雅にカーテシーをするルーナに見惚れてしまった。彼女のいる場所だけ光輝いているような錯覚に包まれた。

「おや？ バルビエ卿はルーナに見惚れているのか？ まあ、ルーナは賢く美しい、仕方がないことだな」

「まあ！ それはあり得ないことですわよ。侯爵様から見たら、わたくしは子どもですもの」
「はは……と笑う王太子殿下にルーナがそう言葉を返す。

頼むからその先は言わないでくれ、もう子どもだなんて思っていないから……

王太子夫妻を前にしてルーナの言葉に慌てた私は、思わずそう口に出しそうになってしまった。
「年齢差が気になるのか？ 夫婦になったのであろう？ 仲良くしろよ？」

「助言賜り、光栄ですわ」

ルーナはそう言っただけで障りのない返答をした。俺が彼女に見惚れていたのはたしかだったが……ルーナには伝わらなかった。

その後、パーティーの途中で私たちは抜けて初夜を迎えることになる。

「ルーナ、話がある」

「明日にしてくださいませ」

「いや、今話しておきたいことがある」

「どうぞ」

「……二人でゆっくり話し合いたい」

「それではサロンの準備を頼みましょう」

「夫婦の部屋があるだろう。そこで話し合おう」

「遠慮いたします。わたくし、疲れましたので先に休ませてもらいますわ」

そう言っただけで自室に戻ろうとするルーナの手をとっさに掴んだ。

「悪かった……私が全面的に悪い！ 今まで本当に申し訳ないことをした」

使用人が目を大きく開き、そそくさとその場を去って行った。結婚式を終えたばかりの夫が妻に

平謝りしているのだ。何かあったと普通は思うだろう。

「例のことでしたら気にしていませんわ。それより手を離してくださいませ。痛いです」

ルーナは顔を顰めて、痛そうな表情をしていた。つい力が入ってしまった。白く細い腕だ……捻（ひね）つたら折れてしまいそうなくらい細い。

「……すまない」

「お話はそれだけですわ？ 先ほども言ったように、わたくしは疲れています」

パツと手を離すと、掴まれていた腕をさすりながらそう言った。

「……明日、アグネスが引越してくる予定だ」

「分かりましたわ。それは聞いていましたので理解しております。もちろん虐めなど、卑劣なことは致しませんからご安心を……それでは失礼します」

……あっ、行ってしまった。振り向きもしない。

今日は初夜。念のため、湯浴みをしてから夫婦の寝室へ行ったが、ついぞ朝までルーナが来ることはなかった。冷たいままの寝具を見て後悔した。

来るわけ……ないか。

その日の朝、ルーナは執事長とメイド長に挨拶をしたようだ。

それから使用人が全員ホールに集まっていた。私は突然そのことを聞き、慌ててホールへと向かった。

「本日からこちらでお世話になることになりました。ルーナと申します、どうぞよろしくお願い致します」

します。奥様などと畏^{かしこ}まった言い方は結構ですので、気軽に名前で呼んでくださいますようお願い致します」

にこりと微笑んで挨拶をすると、若くて美しいルーナに使用人たちは虜になっていた。

「しかし奥様……お名前でのいうのは——」

執事長がそう言うと、

「わたくしはまだ年若いですので奥様と呼ばれることが恥ずかしいのですわ。皆さん、そういうわけですので、どうぞわたくしのことは名前で呼びくたさいませね」

と返す。奥様と呼ばれることに抵抗があるのだろうか……しかし夫婦になったのだからそれはダメだ。

ルーナは私の妻だ！ これは間違えようがない事実。あとで話し合いたいと思った。

「おくさ、いえ、ルーナ様。朝食の用意が整いました。旦那様をお呼び致しますので……」

「私はここにいる。ルーナ、朝食にしようか」

メイドがルーナを名前で呼び始めた！ これはいかん。妻としての自覚を持たせねば！

「あら、侯爵様。おはようございます。ええ、そうですわね。わたくし、侯爵様にお話がありましたの」

にこつとこちらを見て笑うルーナ。しかし、嫌な予感しかないのはなぜだろう……

ルーナをエスコートしようと腕を出したが、彼女はメイドにこちらですと声を掛けられ、そのままスタスタと歩いて行って行ってしまった。

食堂に着くと、私とは離れて食事をする。せめてもう少し近くに……

「侯爵様、わたくし、実家では仕事をしておりましたので、結婚後も続けたいと思っています。

もちろんよろしいですわよね？」

プライベートを侵害しない……そこは約束だ。それに、仕事なんだから悪いわけがない。

「ああ、もちろん許可する」

「ありがとうございます。それでは、実家から数人、わたくしの使用人を呼びたいと思っていますのでよろしく願いますわね」

「もちろん許可するよ。それよりも、私たちの契約について今一度話し合いたいと思っているんだが、時間はいいかな？」

ルーナを抱きたいし、以前のように名前で呼ばれたい。「侯爵様」などと他人行儀な呼び方は寂しい。

ルーナもさつき使用人に名前で呼んでほしいと言っていたから、それを真似しようか……

「契約ですか？ 一年更新となっておりますので、見直しは一年後となっておりますわ」

何だ……それ？ 聞いていない。

「一年更新……？」

「ええ。書類にそう書き足しておきましたの。顧問弁護士に相談して作成し直しましたので、法的には有効ですわよ？ 侯爵様も例の書類を作る際には顧問弁護士からの助言を受けたのではなくて？」

「……そうか、一年更新」

書いてあったか？ あの括弧内の部分だけ書き換えられたと思っていた。

嘘だろ……ルーナが考えて、ルーナ自身でサインするようにと伝えたはずだ……

——ルーナが考えて、顧問弁護士に相談して正式な書類を作成して、それに俺がサインをしたのか！ やられた！

「お話は以上ですわ、わたくしはお先に失礼致しますわね。それと食事は別で構いませんので、好きな時にお召し上がりください」

有無を言わず、にこりと笑顔を貼り付けて席を立ち、彼女は出て行ってしまった。

「旦那様、失礼ですが契約とは何の話でしょうか？ 私は執事として聞く権利があります」

しまった。聞かれていたのか！ 結婚前に出した手紙のことを説明した。それはもちろん約束などではなく、契約で法律の元でも有効になるのだそう。

「バカなことを！ なんてことを……」

「いまさらながら後悔をしている。そして今日、アグネスが引越してくるんだ……」

頭を抱えるしかない。

「なっ、まさかあの離れの家具を新調されていたのは……奥様のための準備ではないと？ あそこは、あの離れは、歴代の奥様の癒やしの場になるために作られた建物ですぞ！」

執事は怒りを通り越して呆れているようだ。

「困った……困ったぞ！ どうする。まさかルーナがあんなに美しく成長しているとは思わなかつ

た。最後に見た時はまだ子どもで……」

「バカですか！ 女性の成長は早いのです！ しかも奥様も同意しているとか……まさかあの結婚式の誓いの口づけは……」

「言うな！ 拒否されたんだ……おそろく」

何も言えずに言葉を失っている執事と呆れ返ったメイド長を前に、がっくりと肩を落とすジョゼフだった。

——バカだった。私はバカだ！ 大バカ者だ！

第二章

「奥様。お、く、さ、ま」

メイド長に呼ばれても返事はしない。

「わたくし、そのように呼ばれたくありませんの。わたくしには、両親につけてもらったルーナという名前がでございます。以前もお伝えした通り、そう呼んでもらいたいの。どうしてもダメかしら？」

ここは可憐にお願い。首をこてんと傾げると、メイド長は目を瞑り、咳払いを一つした。

「こ、こほん。それではルーナ様。大変申し上げにくいのですが、旦那様のお客様がいらっしゃったようで……その、どうされますか？ 追いつくことも可能ですか……」

お客様？ ああ！ あの方が来たのね。結婚式の翌日に早速呼ぶなんて、愛されているのね。

「まあ、追いつくなんて！ ご挨拶に行きますわ」

「おくさ……つとルーナ様自らご挨拶にですか！」

驚くメイド長にハッキリと伝える。

「ええ、侯爵様の大事な方ですもの。ご挨拶を差し上げないと失礼でしょう？ これからこの邸にお住まいになるわけだから」

彼女はジョゼフ様の昔からの恋人と聞いている。どんな方なのか見てみたい……っていう好奇心の方が勝っちゃったわ。

応接室へ行くと、そこにはジョゼフ様と噂の恋人がいた。何やら言い争っている。

周りに執事長やメイドたちもいるのに、何をそんなに揉めているのか……

あ、夫婦喧嘩は犬も食わないとかって諺があるから、仲裁は無意味ね。彼らはずっと夫婦のような関係だった、ということよね。

「……あ、ルーナ」

こちらに気がつき、ジョゼフ様が声を掛けてきた。

「こちらの方が侯爵様の恋人ですのね？ はじめまして、わたくしは昨日からこちらでお世話になっておりますルーナと申しますわ。お名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「ルーナ、お世話って言うのは、どうかと……」

ジョゼフ様が何かを言いかけたけれど、私の興味は前に出てきた女性の方にあつた。ジョゼフ様と同じくらいに見えるけど、おいくつくらいかしら？ ドレスの胸元はあからさまにぱっくりと開いていて、男性はきつとこういう色気のある女性が好きなんだわ……そう思った。

「奥様、はじめまして。私はアグネスと申します。今日からこちらでお世話になります。以後、お見知り置きを」

ニコッと笑う目元のホクロがとても印象的。長い黒髪は妖艶で大人の女性といった感じね。私とは真逆だわ。

「はい。侯爵様からお話を聞いておりますわ。わたくしのことは気軽にルーナとお呼びください。ところで何を採めていらしたのでしょうか？ お伺いしてもよろしいですか？」

メイドたちの困った顔を見て、理由だけでも聞いておこうと思つてそう尋ねてみた。明らかにトラブルよね？」

「あの、ルーナ、大したことではないんだ。だから気にしないでほしい」

ジョゼフ様は、なぜか慌ててそう答える。

聞くべき相手はこの二人じゃなさそうね。それなら……

「執事長、何か問題がありまして？ わたくしには聞かせられないお話ですか？」

チラッと執事長がジョゼフ様を見たが、ジョゼフ様は観念したのか肩をガクンと落とした。

「旦那様のお客様がお過ごしになる場所についてでございます。離れでは嫌だとおっしゃってまして、部屋をどうするかと問題が起きております」

「まあ！ この邸には離れがあるのですね？」

窓の近くに寄り、メイド長が指差す方向を見る。離れといつても一軒家のような大きさ。白い壁に濃い緑の屋根が上品だ。

「素敵な建物ですね。わたくし、まだこの邸のことをよく知らないのです、あのような離れがあるとは存じませんでしたわ」

広い敷地内ですもの。全体を見て回りたいわね。

婚約してからこの邸に来たのは数回。夫人とお茶をして、手前のバラ園までしか見たことがない

もの。

「お客様は本邸で過ごされたいと申しております、旦那様は奥様が快適に過ごすために、それは困ると断っております」

ジョゼフ様がキッと執事を睨んだが、執事はシラツとした顔をしている。どちらに良い顔をしたのかしら？ 優先はアグネス様でしょうに……

「まあ、わたくしのことは気になさなくても良かったですのに。アグネス様とおっしゃいましたよね？ どうぞ本邸でお過ごしください。お部屋はたくさんありますでしょう？ アグネス様が過ごしやすいように、わたくしが離れでお世話になりますわ。それで解決ということにしませんか？」

手をパンと軽く叩き、首を傾げてにこりと笑う。

家庭内、いえ敷地内別居ね。何かあればすぐに本邸に来られるし、ジョゼフ様に会わずに済むし、良いこと尽くめじゃない！

「ダメだ！ 私の妻はルーナだからそれはできない！」

「そうです、奥様には本邸にいてもらわないといけません」

「ルーナ様が離れなんて困ります」

そんなに皆が揃って反対しなくても……

「侯爵様、契約第一条を実行いたします」

「……それなら私は契約第四条だ！」

「ねえ、何の話をしているの？ ルーナさんが良いって言つてんだからそれで良いじゃないの！」

「アグネス様のおっしゃる通りです。二対一ですので、わたくしは離れでお世話になります。家具の搬送準備をお願いしますわ」

パンツと手を叩いて、笑顔で応じる。

「……ルーナ！」

「お二人の邪魔は一切いたしませんので悪しからず。それでは失礼しますわ。離れを見てきますわね」

うん。これでいい！

離れで暮らすことでジョゼフ様の顔もアグネス様の顔も見ずに済む。明日から私の事業を手伝ってくれる使用人も来る。

契約が終わるまでの一年間、離れで暮らしてすっかり稼ごう！

そして離れを見に行くために、応接室を出た。小さいけれど門扉もしっかりあって、一軒家といっても差し支えないわ。一周ぐるっと見て回った。

「へー。結構広いのねえ。使用人部屋もあるし、キッチンも広い。うん、良いわね。ところで……この趣味の悪い家具を、早くあちらに持っていくように頼んでくれる？」

「はい、お嬢様」

お嬢様と私を呼ぶ侍女のスージーは実家から連れてきた。というか、自らついてきた。彼女は二十歳で、私が十歳の時からついてくれている、頼りになるお姉さんという感じ。

私がジョゼフ様からの手紙で胸を痛めている時に、スージーは何も言わずに寄り添ってくれた。

一人で泣いていたのに、スージーには分かったみたい。

よく慰めてもらったし、私が離縁を申し出ることを唯一知っている信頼のおける侍女だ。

それからあつという間に引越しは完了。すると、ジョゼフ様が訪ねて来たということで応接室に通した。

「すまない、ルーナ！ 何とかして本邸に戻るようになるから……」

「何をおっしゃいますの？ ジョゼフ様からアグネス様を邸に招くとあらかじめ聞いていましたので、謝る必要はございませんわ。わたくしのことはどうぞお気になさらずに」

いまさ何と言っているか分からない。正妻と愛人が同じ邸に住むなんて聞いたことがないわ。そんなの、使用人たちも困らせてしまう。

「そんなことができるほど私は冷血ではない！」

この人、何を言っているのかしら？ はあっとため息をついた後、私はこう告げた。

「それでは冷血になってくださいな。契約内容は遂行いたしましたよう。そういう約束ですから。お話は以上ですか？」

「……ルーナ」

「アグネス様がお待ちですよ？ まだこちらに来て間もないでしょうし、一緒にいてあげてくださいね」

スージーに扉を開けさせ、ジョゼフ様に帰ってもらうように促した。

……早く帰れっての。

そう心の中で毒づき、私はジョゼフを部屋から追い出した。

* * *

「さすが侯爵邸！ 広いのね。ここで私が妻になるなんて最高だわ！」

アグネスのその言葉を聞いて、使用人が一斉に冷たい目で俺を見る。妻を迎えたばかりだというのに、自分が妻だという別の女がやって来たのだ。

「メイド長、すまないがアグネスにつけるメイドを用意してくれ」

「……^{かしこ}畏まりました」

と言いながら睨まれてしまった。居心地が悪い。

「部屋は、とりあえず客室で良いか？」

アグネスは離れで過ごさせる予定だったのだから、予定が狂ったと言わざるを得ない。

「ルーナさんが使っていた部屋で良いわよ、もう使つてないでしょう？」

ルーナの部屋？ いやいや、それはダメだろ！ あそこはルーナの好みを聞いて壁紙や絨毯^{じゅうたん}なども変えさせた、ルーナが住むための部屋だ。

「ダメだ、ルーナとアグネスの好みは違うだろう？」

言い聞かせないと！ ここで折れてはルーナの思うツボだ！ きつと。おそらく？

「良いじゃない？ どうせ使つてない部屋だもの。そうだ、聞いてきてよ！」

メイドたちの白い目、絶対にダメだと言わなきゃ！ あそこは代々侯爵家の夫人が使う部屋だ。

「一番良い客室を用意してくれ」

「……^{かしこ}畏まりました」

メイドに客室を用意していると、ルーナの部屋から家具が搬送され始めた……本気か？

しばらくその様子を呆然として見ていたら、ほどなくして、ルーナの部屋に、離れから運び出された家具が入れられようとしていた。

「あつ、おい、そこはダメだ！」

ハッ和我に返って、使用人たちの家具の搬送を止める。扉の前で大きく両腕を開いた。

「「ルーナ様のご指示です」」

と彼らはそう言い切った。すでに使用人にルーナの信者が……当主は私だぞ……

「ここはそのルーナの部屋だ……それは変えられない。頼むからやめてくれ！」

私の必死さが伝わったようだ。使用人は渋々別の部屋に家具を持って行った。まさかこんなことになるうとは……

「旦那様！」

次は何だよ……

呼ばれた先でアグネスとメイドたちの言い争う声が聞こえてくる。

「良いから連れて行きなさい！ 私の言うことが聞けないの!? メイドのくせにっ!!」

アグネスがメイドに突っかかっていた。何だよ、一体……

「……どうした？」

メイドに聞くと、睨まれてしまった。

私はこの家の当主だぞ……生意気な態度は取らない方が身のためだ！　と言いたところだが、今日は大目に見ておこう。

「お客様が夫婦の寝室に連れて行けとおっしゃるものですか」

「何よ！　見ただけじゃない！　どうせ使わないんでしょう？　代わりに私が使ってあげても良いけど？」

そんなことを使用人の前で言うなんてどうかしている。

……あ、メイドと目が合った。視線が……いや、目が見えない。そうだ、今は目が見えないことにしておこう。

「今日は疲れた。いつもの眼精疲労による頭痛だろう。私は少し休むことにする。アグネス、晚餐は一緒に取ろう……」

そう言っ部屋を後にした。

アグネスの機嫌を収めたら、あとでルーナのご機嫌を伺いに行こう。ルーナの顔が見たい。

「すまない、ルーナ！　何とかして、すぐに本邸に戻るようにするから……」

「何をおっしゃいますの？　ジョゼフ様からアグネス様を邸に招かれるとあらかじめ聞いていたの、謝る必要はございませんわよ。わたくしのことはお気になさらずに」

「そんなことができるほど私は冷血ではない！」

「それでは冷血になってくださいな。契約内容は遂行いたしましょう。そういう約束ですから。お話は以上ですか？」

冷血になれって……ルーナに対して？　無理無理。

「……ルーナ」

だんだん声も掠れてきた。疲労困憊だ。

「アグネス様がお待ちですよ？　まだこちらに來られて間もないでしょうし、一緒にいてあげてくださいね」

なんて優しいんだ！　自分のことよりアグネスを優先するようにだなんて……ルーナだって、昨日来たばかりで心細いだろうに。

まだ一年あるという契約だが、ルーナに好かれるように努力すれば契約内容を変えられるのではないか？

あの子もだったルーナが、こんなに美しく優しい淑女に成長していたなんて、私は愚かなことをした……

——どうにかしてルーナが欲しい。彼女を手に入れたい。

執務室に戻り、何とか問題を解決する糸口がないものかと顧問弁護士を呼んだ。

「急に呼び立てて悪かった。この書類に目を通してほしい」

弁護士は書類を読み始めた。何度も繰り返し読んでいる。

「……侯爵様のサインがしてありますね」

はあっ……と弁護士はメガネを取って深いため息をつきながら、眉間をぐりぐりとしていた。眼精疲労か？　これだけ書類を確認したら疲れるよな。気持ちが分かるだけに申し訳ない気分になる。

「したよ。その時はそれが最善だと思ってサインした。しかし、今はそれを守りたくないんだ。だから、何とかならないか相談をしたい」

「……無理ですね。それに大問題が……」

書類を机に置き、弁護士は私の顔を見た。

「このような書類を作成する時は、ぜひサインをする前に声を掛けてもらいたかったですね」

呆れた口調なのがよく分かる。最近、私の周りの者たちは皆そういう感じだ。

「何か問題でもあるのか？」

「奥様はどちらに？　お見かけしませんか……」

「離れに引越してしまったんだ。だから困っている」

「……白い結婚後は離縁するかどうかって……離縁を申請されたら奥様との結婚は無効となります。奥様がこの本邸を出られたということは、そういう意志があるからです！」

「……嘘だろ。私はサインをしないぞ。一年後に新たに再契約だ！　いや！　次は契約などしない。ルーナだけを愛する」

「この手紙は何ですか……『愛されることを望むな』とか。女性をバカにしています。奥様に訴え

られたら確実に負けますよ！　それに世の中の女性たちから総スカンです。恐ろしい」

「だから、謝りたいと言っているんだ。私が悪かったと……」

「悪いのは誰かとか、そういう問題ではありません。とにかく、この一年の間に奥様の気持ちを侯爵様に向けることです……それができなければ無理ですね」

疲れた様子の顧問弁護士を労わるようにして送り出す執事……

「旦那様、晚餐の用意ができました。お客様をお迎えください」

「ああ、今行く」

アグネスを迎えに行くと、どぎつい化粧をして香水臭かった。明るいところでその姿を見ると気持ち冷めてしまう。今から晚餐なのに香水の匂いで食欲が失せた。ルーナのように清潔で、化粧をしなくても若々しく、瑞々しい肌とは違うと思ってしまった。

「ジェフ、明日商人を呼んでくれる？　ドレスが足りないのよね」

「……分かった。呼んでおくよ」

結婚休暇で十日の休みを申請した。アグネスと過ごす予定だったが、急に気持ちが冷めた。アグネスを責めるわけではないが、ついルーナと比べてしまう。

（この十日間は、毎日ルーナに謝りに行こう……）

その夜、アグネスが私の部屋に来て奉仕してくれたが、気持ちと共に萎えてしまった。

「どうしたの？　ジェフが元気ないと、ここも元気がなくなるのね」

気持ちの問題だと分かっていたが、どうすることもできなかった。

昨日の白いドレス姿のルーナを見て、ルーナを汚したいと思った。あの白く張り艶のある肌に触りたい。手入れされたプラチナブロンドの髪に顔を埋めたい。

結局、この日はアグネスを抱く気にはなれなかった。どうすれば良いんだ……！

* * *

「うん！ 出だしは良好ね！」

私は王都に焼き菓子店を出している。

「王太子妃殿下のお気に入り！」というキャッチコピーを使ってもいいと王太子妃殿下に言われたので、ありがたく使わせてもらうと、店はたちまち人気店となった。

王太子妃殿下の名称を使うことで、手を抜くことができなくなった。王太子妃殿下が私のお店を信頼してくれている証だから期待に応えたいと思うし、店を維持する努力を惜しむつもりはない。

味や形はもちろん、ラッピングに至るまで完璧にした。

そして中でも密かな人気は……アウトレット商品だ。

商品を作るにあたり、どうしても形が悪くなったり、焼けすぎてしまうものが一割は出てしまう。それらを安く提供することにした。

その代わり、こちらは簡易包装でひと目でアウトレット商品と分かるようにした。自宅で食べる

分には充分だし、焼けすぎたものも、それはそれで香ばしくて美味しいから。

こういったものはお茶会で使われることはないし、手土産にもできない。貴族はお茶会のお菓子をケチらないから、このアウトレットのお菓子を出すことはない！ だってプライドがあるもの。

ただ、メイドたちが主人に言われて買いに来た時に、自分たち用としてなら手が出せる商品。そこを狙って価格設定も決めた。

「良いアイデアです！ これでロスも減りますし、売上げアップですね。メイドたちにも評判だと聞きましたよ」

スージーが大袈裟に褒める。

「週に一度は孤児院にも寄付という形でアウトレットの品を持って行きましょう」

「それも良い考えです！ お嬢様。喜ばれること間違いなしです！」

「ふふっ、ありがとう。今月の売上げが楽しみだわ」

あとは、今度オープンする庶民向けの店のチェックにも行くことにした。貴族街とは少し距離が離れているので、馬車に乗って、庶民街へ。

こちらの店の内装はかわいらしく水色になっている。一方、貴族の店はシックなイメージでホワイトとブラウンにっていて、高級感がある。

「うん。こっちは水色で正解ね！ 明るくていい感じ！」

「ルーナ、来ていたのか？」

声を掛けてきたのはフェルナンドだった。ずいぶん久しぶりに会う気がした。

「ええ、今来たの。貴族街の店は繁盛していて、こちらも楽しみだわ」
にこにこしながら内装を見て回る。

「旦那は良いのか？ おまえ……新婚だろ」

そういえば離縁の話をフェルナンドには言っていなかったわね！ もう結婚したんだから言ってもいいかな……信頼している友人だもの。

「お互いのプライベートには口出しをしないの。それに彼女も昨日、邸に引越して来たから、今ごろ仲良くしているんじゃないかしら？ 邪魔者はいない方が良いでしょう」

結婚する前は、こんなことは恥ずかしくて言えなかったけれど、結婚して昨日、一昨日とジョゼフ様の振る舞いを見ていたら、泣いていたことが馬鹿馬鹿しく思えた。

結婚した今は、早く一年経って離縁することが目標だ。その時、私は庶民として、この店のオーナーとして暮らせたらいいな。

両親にお金を返して、貴族街の権利も渡すつもりだけど、この店だけはお願ひして続けさせてもらいたい。そのためには店を繁盛させて、生活できるように稼がなくてはいいけない。

「彼女？ 何だ！ それ！」

そりゃ驚くわよね。

「契約書があるの。ちゃんと弁護士立ち会いの元で作成したから問題はないわよ。侯爵様からは、白い結婚後に離縁するかそのままにするかは私に委ねると言われているから、もちろん離縁するわ。結婚の際に両親が持たせてくれた一億リルを返すためにお金を稼がなきゃいけないの。とりあえず、

あと半分はこの一年で稼がないと！」

両手を握りぐつと上に上げて、頑張るわ！ と気合を入れる私の姿を見てフェルナンドが辛そうな顔をした。

「その金、足りなかったら僕に言って……用意するから。先に一億リル出しても良い」
心配させてしまったみたい。

「ダメよ。お金を借りたくて言ったわけじゃないのよ？ 自分の力で何とかしたいの」
「……分かった。でも、足りなかったらその分は貸すから、必ず相談して。絶対に！ 約束だ」

「そうね。足りなかったら貸してね！ 利子はおまけしてくれると助かるわ」
その時は遠慮なくフェルナンドに借りることにしようかな。

持つべきものはお金を持っている友人。でも金の切れ目が縁の切れ目というから、フェルナンドには借りられないわね。やつぱり頑張って自分で稼がないと！

あまり長居すると作業の邪魔になる。出て行こうと思ったところに、スージーが案を出してくれた。

「お嬢様、ご実家に結婚の挨拶に行きますか？」

「そうね、行きましょうか！」

結婚後は実家に挨拶に行くのが普通とされている。忘れるところだったわ。